



# 発掘調査速報展

沖縄県立埋蔵文化財センター

2013 8月20日(火)～9月29日(日)

ごあいさつ	1
平成 24 年度調査箇所	2
中城御殿跡発掘調査	4
円覚寺跡発掘調査	6
首里城跡発掘調査	
「御内原東地区・御内原北東地区・東のアザナ北地区」	8
海軍病院建設予定地内発掘調査	14
基地内文化財分布調査	16
県内遺跡詳細分布調査	18
戦争遺跡詳細確認調査	23
宮国元島上方古墓群発掘調査	26
白保竿根田原洞穴遺跡確認調査	28

## 凡 例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報展2013」を補完するものとして編集した。
  2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

## ごあいさつ

沖縄県内には貝塚、グスク、集落跡や古墓群など約2,500箇所以上の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人が残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄の歴史・文化の研究に役立てています。

通常、発掘調査の開始から出土品を整理し、報告書を刊行するまで数年を要します。そこで、前年度の発掘調査で得られた最新の情報をいち早く公開するため、「発掘調査速報展」を毎年開催しております。

今回の「発掘調査速報展2013」では、平成24年度に調査を行った沖縄本島・離島を含む9事業の発掘調査および詳細分布調査の概要と主な成果について、出土遺物や写真パネル等で紹介しております。

この速報展を通じて、多くの方々が郷土の埋蔵文化財について親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深めていただける機会となれば幸いです。

平成25年8月20日

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 下地英樹

# 平成24年度調査実施箇所

沖縄本島

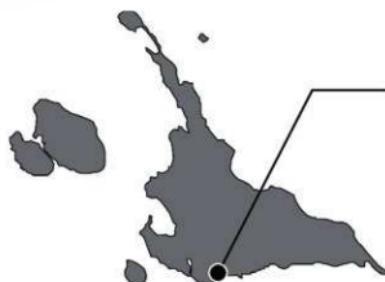


中城御殿跡発掘調査  
(那覇市)

円覚寺跡発掘調査  
(那覇市)



宮古島



宮国元島上方古墓群  
発掘調査



戦争遺跡詳細確認調査（県内全域）

座間味村



南大東村



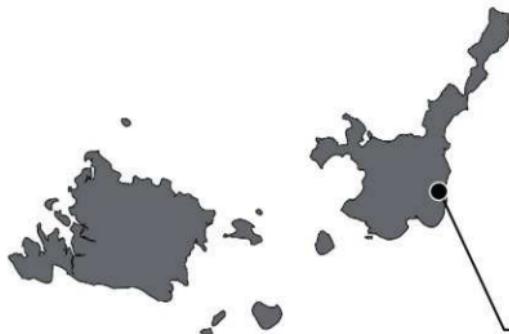
うるま市



南城市・八重瀬町



石垣島



白保竿根田原洞穴遺跡  
確認調査（石垣市）



なかぐすく う どうんあと はっくつちょう さ  
中城御殿跡発掘調査

事業名：首里城公園発掘調査

所在地：那覇市首里大中町 1-1

時代：近世、近代

調査期間：2012（平成24）年9月1日～2013（平成25）年2月28日

調査内容： 平成19年度から実施している本調査ですが、平成24年度は7か所にトレンチを設け合計350m<sup>2</sup>の面積で発掘調査を実施しました。

トレント1では、旧県立博物館建築時の工事が石灰岩の地山まで達していて、中城御殿の遺構は残っていないことがわかりました。

トレント2では、石敷き、石組み、石積みや溝などが見つかりました。かつて女中部屋や便所があった場所です。

トレント3・4では、当時の遺構は残っておらず、基盤層であるクチャやニーピの層を確認しました。

トレント5では、石牆の根石を確認しました。中城御殿の周囲を囲んでいた石牆のうち、地上に見える部分には大きな石が多く使われていて、直線や扇形の曲線をうまく組み合わせて積んでいます。表面も平らに整形されていて、見た目を意識したデザインとなっています。それに対して根石の大きさは比較的小さく、表面には凹凸が残り、形もシンプルな長方形が多いです。

トレント6では土留めの石積みや造成層を確認しました。

トレント7では、石積みが見つかりました。これは中城大親という建物の南側にあった、瓦石垣に相当します。

これらのトレントからは、屋根瓦や陶磁器、金属製品、動物や魚の骨などが出士しました。

※石牆…石囲い

■中城御殿の歴史■

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅です。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町）に創建されました。その後、1875（明治8）年に現在の首里大中町であるこの場所に移転し、1945年の沖縄戦で破壊されるまで存在していました。その跡地には2007年（平成19）年まで県立博物館がありました。



中城御殿トレンチ配置図、間取り復元図



トレンチ2 遺構検出状況（上が北）



トレンチ5 石牆遺構検出状況(南東から)



トレンチ6 奥にみえるのは龍潭(北東から)



トレンチ7(上が南)

# えん かく じ あとはつくつちょう さ 円覚寺跡発掘調査

事業名：円覚寺跡発掘調査

所在地：那霸市首里当蔵町 2-1

時代：グスク時代～近代

調査期間：2012（平成 24）年 7月 2日～9月 28日

調査内容：円覚寺は、1492 年から約 3 年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院です。

その創建は、尚真王（第二尚氏王統第三代）が父親である尚円王の御靈を祀るために建立したと伝えられ、第二尚氏の菩提寺でもありました。現在は国の史跡に指定されています。

円覚寺の境内に数多く存在した建造物は、沖縄戦により破壊されました。平成 9 年度から平成 13 年度までの 5 力年間、遺構確認調査が行われ、平成 14 年度からは円覚寺跡の外周を囲う石牆の復元整備を実施しており、その一環で平成 19 年度から継続して遺構確認調査を実施しています。

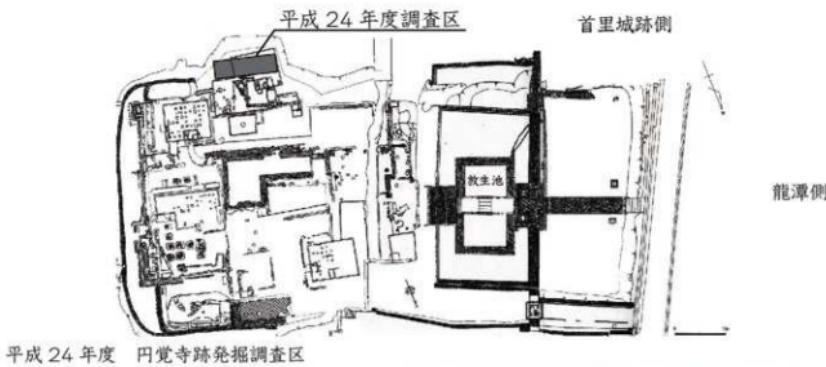
平成 24 年度の調査は、南側石牆の復元整備予定範囲における根石確認を目的とし、昨年度までに整備された箇所から西側の延長上に調査区を設定して、発掘調査を行いました。

調査の結果、保存状態の良好な根石が調査区全体に渡って残っていることが確認出来ました。その他、石敷遺構や石積み、石列などの遺構も見つかりました。

出土遺物は、中国産や沖縄産の陶磁器を中心に、瓦、壇せんも多く、その他にも本土産陶磁器、石製品、金属製品などがみられました。中でも注目されるのが、漆を塗った焼物の壺です。その表面には、牡丹や唐草などの植物や格子状の文様が立体的に浮かび上がるよう表現されています。焼物の漆製品の出土事例はほとんどなく、また記録や伝世品にもみられないことから、この壺が円覚寺にとってどのような意味を持つ資料であるのか、詳細については今後の研究によって明らかになっていくでしょう。



漆製品出土状況



石牆検出状況



石牆及び石敷構検出状況



下部石積み検出状況

# しゅりじょあとはっくつちょうさ 首里城跡発掘調査

事業名：首里城跡発掘調査

所在地：那覇市首里

時代：グスク時代～近代

調査期間：2012（平成24）年7月2日～2013（平成25）年3月28日

調査内容：首里城跡の発掘調査は、沖縄戦で焼失した首里城の復元整備を行うため、必要な情報を得ることを目的とするものです。昨年度は、10ページの図に示した場所で発掘調査を実施しました。以下、調査成果を御内原東地区・御内原北東地区・東のアザナ北地区の3ヶ所に分けて紹介します。

## かーちばる 御内原東地区

この地区は、かつて宝物庫として使用された金蔵（1732年創建）と呼ばれる建物と、それに伴う石積みや階段などがあったとされる場所です。今回金蔵自体の遺構はみつかりませんでしたが、金蔵の東側に位置する石積みや階段のほか、石積みと石列で構成された落ち込みなどが確認できました。

金蔵東側の石積みは相方積みで直線的に積み上げるもので、目地を漆喰で埋めている箇所もみられます。南北方向に延びており、南側で琉球石灰岩の岩盤に、北側で階段に接しています。

階段は石積みで構築された緑石を南北両面に持ち、西側方向に降りていく構造ですが、先端部分は沖縄戦等で破壊されたとみられます。この階段のすぐ南側に炭混じりの黒色土が堆積する区画があり、そこから陶磁器・木製品・骨製品・布製品・自然遺物などが出土しました。これらの年代は18世紀前半に位置づけられ、金蔵が創建された頃に廃棄された遺物と思われます。階段は区画の南側にもう1基、金蔵の南側で琉球石灰岩の岩盤を加工したものが確認できました。その遺構は白銀門への通路の一部と考えられます。

落ち込みは調査区の北側に位置し、内郭の城壁に接する形で構築されています。平面形は長辺約340～400cm×短辺約320cmの台形状をなし、深さは約30～100cmで底面は東側に傾斜しています。この中から陶磁器・獸魚骨・貝などが大量に出土しており、16世紀後半に一括で廃棄されたと考えられます。

## うー ちばる 御内原北東地区

この地区は、かつて内郭の城壁があったとされる場所です。調査の結果、内郭城壁に相当する石積みのほか、城壁の外側に取り付く通路と階段、土留め石積み、方形石組みなどが確認できました。

内郭城壁は平面形が「Z」になる場所の基礎部分で、幅は約5～6mを測ります。内面の一部に南北方向に延びる石積みが隣接していますが、これは城壁の根固めと思われます。

通路は西側方向に傾斜する石畳道で、その先端に踏面に勾配を持ついわゆる琉球式の階段が敷設しています。

土留め石積みは内郭城壁の外面部分の下層から検出されたもので、北側に面を持っています。この調査区は南から北に急傾斜する場所であるため、内郭城壁を積み上げる前の基礎工事として土留め石積みが必要だったのでしょう。

方形石組みは内郭城壁の北側に位置し、旧琉球大学校舎の基礎の下から検出され近代のゴミ穴と考えられます。平面形は短辺約80cm×長辺約120cmの長方形で深さは約50cmを測り、四方の壁面を雑な石積みで仕上げています。この中から陶磁器や自然遺物（獸魚骨・貝・炭化物）が出土しています。

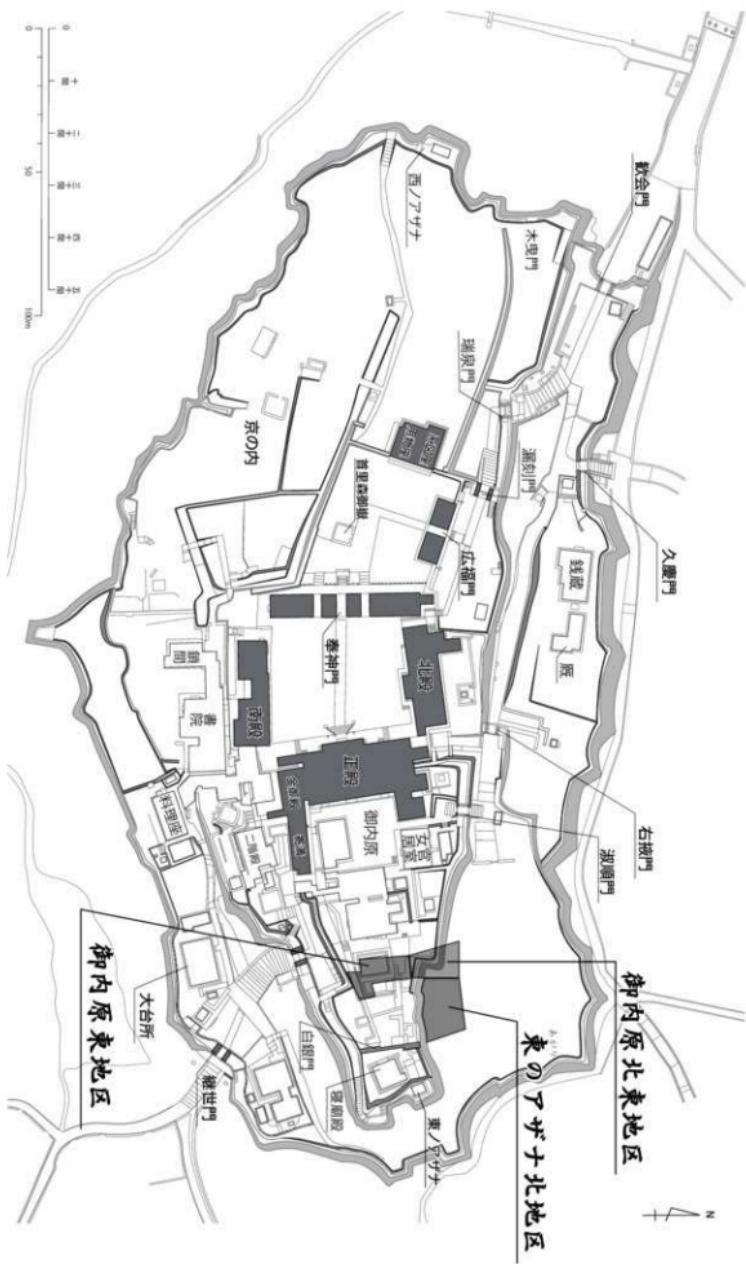
## あがり 東 のアザナ北地区

調査の結果、自然の洞穴を加工したとみられる横穴とそれに伴う石列のほか、沖縄戦時に構築された壕などが確認できました。

横穴は「ウシヌジガマ」と伝承される施設で、北側の開口部を石積みで塞ぎ、石積みの中央付近に出入口1個と窓穴2個を設けています。内部は壁面に人工的な加工跡が残り、床面の北半分には石灰岩を砂利状にした石粉を10cm程の厚さで造成し、南半分には基壙状に石を敷き詰めています。御内原の女官たちが緊急時に避難した場所と伝わっていますが、内部構造からみると墓のような性格を持つ可能性もあります。

壕は沖縄県師範学校の学生たちが構築した避難用の施設で、「留魂壕」と呼ばれていました。高さ約170～180cm・幅約200cmのサイズで岩盤を縦横に掘り進めており、内部には構築時の工具跡や坑木を組んだ跡が残っています。天井や壁面の崩落が著しいため詳細は不明ですが、全長は100m以上になると想定されます。

このほか、横穴と壕の前には切石積みの石積みが積み上げられ、その北側には石列や舗装面が確認されています。いずれも「ウシヌジガマ」に関係する遺構と思われます。



うー ちばる  
御内原東地区



全景（北側）



全景（南側）



漆製品出土状況（黒色土内）

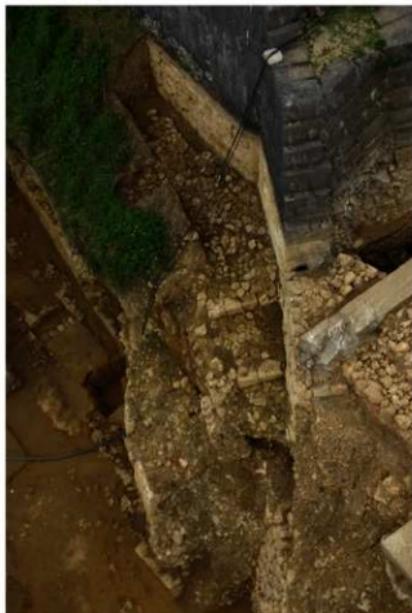


遺物出土状況（落ち込み内）

うー ちばる  
御内原北東地区



全景（南側）



通路及び階段



内郭城壁内面



方形石組み内埋土半截

※半截…半分に切ること

あがり  
東 のアザナ北地区



全景



ウシヌジガマ開口部の石積み



ウシヌジガマ床面南側石敷き



留魂塚の入口



ウシヌジガマ及び留魂塚前の遺構群

# かいぐんびょういんけんせつよていちないはっくつちょうさ 海軍病院建設予定地内発掘調査

事業名：海軍病院建設予定地内発掘調査

所在地：宜野湾市普天間（キャンプ瑞慶覧内）

時代：縄文時代、グスク時代、近世～近代

調査期間：2012（平成24）年8月29日～2013（平成25年）3月28日

調査内容：本事業は、宜野湾市にある米軍基地内（キャンプ瑞慶覧）において、病院建設に伴って現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録を作成することを目的とした緊急発掘調査です。

平成24年度の調査は、くしぶる普天間後原第二遺跡、普天間古集落遺跡が広がる範囲において実施しました。その結果、縄文時代、グスク時代、近世～近代の3時期に相当する遺構や遺物が確認されました。

縄文時代の遺構は今回の調査では確認されておりませんが、縄文時代晩期の土器、石器などの遺物が僅かに出土しています。これらの遺物はグスク時代、近世の包含層から出土することから、グスク時代以降に混入した遺物だと考えられます。

グスク時代の遺構は、普天間後原第二遺跡の範囲を中心に多くのピットや土坑が確認されています。ピットの平面的な位置関係や埋土を検討した結果、複数の掘立柱建物跡を想定することができました。二本の中柱をもつ大型のものから、6本柱あるいは4本柱の比較的小型のものも確認されています。このほかに、柵状にのびるピット列や、深さが2mを超える大きな土坑も検出されており、これら建物や構造物などの配置からはグスク時代における集落の様相をうかがうことができます。遺物はグスク土器、カムィヤキ、中国産磁器がわずかに出土しています。

近世～近代に相当する時期は、遺構・遺物ともに多く確認されています。普天満宮へと続く道跡を中心にピット、土坑、溝、井戸、石積み、炉跡、避難壕など普天間古集落の多種多様な遺構が確認されています。出土遺物は、沖縄産や本土産の陶磁器を中心に中国産磁器、瓦、金属製品、木製品など、多様な遺物が出土しています。

※ピット…小さな穴



掘立柱建物跡群



カムイヤキ出土状況



普天間宮へつづく道跡



炉跡



土坑内遺物出土状況

# き ち な い ぶん か ざ い ぶん ぶ ち ょう さ 基地内文化財分布調査

事業名：基地内文化財分布調査

所在地：宜野湾市（普天間飛行場内）

時代：縄文時代後期～晩期、弥生～平安平行時代末、グスク時代初頭、近世～近代

調査期間：2012（平成24）12月10日～2013（平成25）3月21日

調査内容：



平成24年度の調査区全景。両トレーニチは東西に並んで設定している。

## 事業の概要

沖縄県内の米軍基地・自衛隊基地内にある埋蔵文化財（遺跡）の分布状況やどのような遺跡かを明らかにするため、平成9年度から文化庁の補助を受けて調査を実施しています。おおやまかららーばる昨年度は平成23年度に引き続き、普天間飛行場内の大山加良当原第四遺跡の確認調査を行いました。

## これまでの調査

大山加良当原第四遺跡は、平成19年度にこの事業の試掘調査で発見されました。これまでの調査で近世・近代（約400年前以降）、グスク時代初頭（約800年前）、縄文時代後期～晩期（3,000～2,500年前）の3つの時代にまたがることが分かっています。

## 平成24年度の調査

これまで確認調査を行っていた3トレーニチに加え、2トレーニチの西側も調査を行いました。3トレーニチは発掘が深くなるので、トレーニチを幅2m拡張した調査区を調査しました。

その結果、北東際で溝状遺構の続きや土坑（性格不明の穴）が確認されました（写真1）。土器も土坑のすぐ下から出土しました（出土状況は写真2）。また平成23年度に発見された焼土の跡の年代を測定したところ、約1,000年前の弥生～平安平行時代の終わり頃のものであることが分かりました。

一方、2トレンチは平成20年度の続きを調査し、縄文土器約50点がまとまって出土しました（出土状況は写真3・4）。



写真1 平成24年度に3トレンチでみつかった遺構。時期の異なる色々な遺構が切り合う。



写真2 3トレンチ発掘中に土器が出土した。この遺跡から出土した他の土器とは色や質が異なる点が注目される。



写真3 2トレンチの様子。調査区内にある土柱には出土した土器がある。このようにすぐ取り上げないことで出土地点のまとまりがみえてくる。



写真4 2トレンチで出土した土器。この土器の表面は黒く変色していた。

## 調査によって分かってきたこと

ここまで調査で、この遺跡は東側に遺構や遺物が多く残されていることが分かってきました。また土器などの縄文時代の遺物は何箇所かにまとまって、しかもほぼ水平に埋まっていることがみえてきました。これから進めていくトレンチ2の西側や、1・4・5トレンチの調査によって遺跡の範囲や遺構の残り方がより詳しく分かってくると考えています。

### 普天間飛行場内の遺跡

平成10～21年度までの試掘調査（※）によって、調査可能な約3割の面積から102遺跡を確認しています。基地内文化財の保存活用や返還後の円滑な再開発に必要な、遺跡の具体的な内容やより詳細な遺跡の範囲を明らかにするため、平成22年度から確認調査を行っています。

※平成13年度からは宜野湾市教育委員会と共同で実施。

# けんない い せきしょうさいぶん ふ ちょう さ 県内遺跡詳細分布調査

事業名：県内遺跡詳細分布調査

調査地：座間味村、渡嘉敷村（船越原遺跡）

時代：縄文時代～近代

調査期間：2012（平成24）年6月12日～7月27日・8月14～17日

調査内容：これまで埋蔵文化財の分布状況の把握が不十分であった慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）において、平成22～26年度の予定で遺跡分布調査を実施しています。

平成24年度は、座間味村の古墓群を中心とした踏査と、渡嘉敷村船越原遺跡の範囲確認調査を実施しました。

## 座間味村

座間味村の古墓群は、座間味島で9地点、阿嘉島で3地点、慶留間島で3地点、合計15地点を確認できました。墓は、コンクリート製のものや破風墓、亀甲墓などの様々な形態があります。その中でも、座間味港西岸のアカエー墓などは、岩陰に多くの風葬人骨や厨子壙が見られる岩陰墓が特徴的です。

## 慶良間諸島

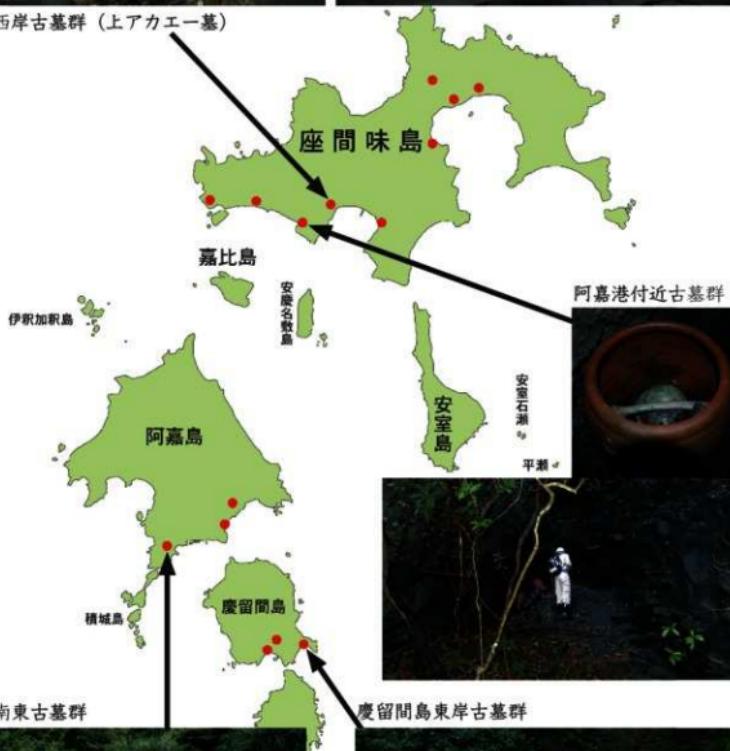




座間味港西岸古墓群（上アカエ一基）



阿嘉港付近古墓群



阿嘉集落南東古墓群



慶留間島東岸古墓群

## 渡嘉敷村

船越原遺跡は、渡嘉敷島南端の海岸砂丘に位置する縄文時代前期～弥生並行期（約6,000～2,000年前）の遺跡で、1975（昭和50）年の採砂時に、大学生が多く土器を発見しました。県内でも10数遺跡でしか見つかっていない爪形文土器（約6,000年前）や、類例が少ない神野A式土器（約5,000年前）などが出土していること、石斧などの材料となる石材が大量に見られることから、重要な遺跡と考えられていました。しかしながら、本格的な発掘調査が行われることなく、遺跡の崩壊が進み、その保存が懸念されていました。

そこで、当センターでは、当遺跡の保存策を検討するために、平成22・23年度の船越原遺跡周辺の地形測量を行い、24年度より範囲確認調査を開始することになりました。今回の調査では、爪形文土器が散在し、その包含層が露頭しているⅡ地点の周辺において、露頭断面の確認、4ヶ所のトレンチ調査を行いました。その結果、Ⅰ層（現砂丘層）、Ⅱ層（旧地表・砂丘層）、Ⅲ層（黄褐色～浅黄色シルト砂層）、Ⅳ層（明赤褐色砂層）、Ⅴ層（灰白色砂岩）の層序を確認しました。このうち、自然堆積と考えられるⅢB層（浅黄色シルト砂層）に爪形文土器が比較的のレベルが揃って包含されていることが明確になりました。4ヶ所のトレンチ調査では、2地点露頭断面の西側トレンチと、南側10mの6018EトレンチでⅢB層が確認され、爪形文土器と、石英・砂岩等の大小の礫・破片が出土しました。

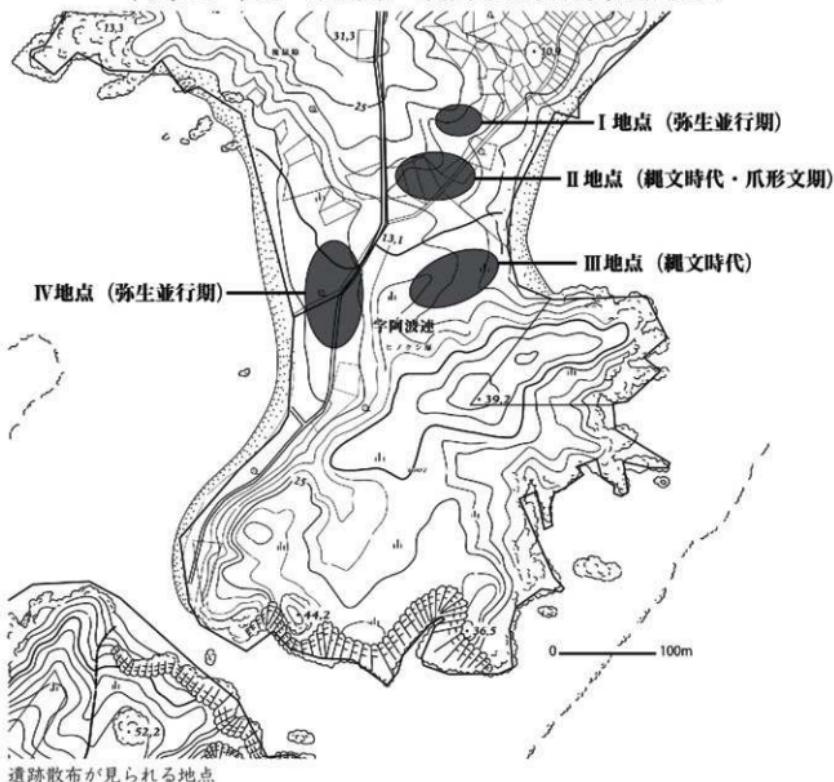
爪形文土器を包含するⅢB層は、標高9.5～10mに位置し、現海岸線より100m以西に南北20m程度の範囲に広がることが分かりました。この範囲より海側へ約10m東の地点では、ⅢB層の下層にピーチロックが堆積していました。このことは、現在爪形文土器の年代と考えられている約6,000年前に近い時代には、海岸線が現在よりも6mも高く、約100m内陸まで進入していたことが想定されます。

今後の調査では、爪形文期の具体的な生活の痕跡や、他の時期の状況を確認していきたいと思います。



調査区遠景

平成 24 年度 船越原 範囲確認調査実施位置図



遺跡散布が見られる地点

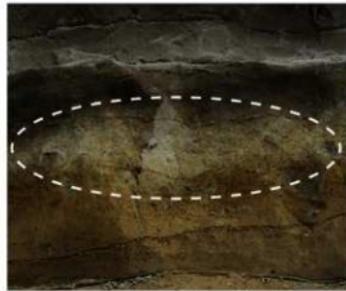


24 年度調査区位置図

平成 24 年度 船越原遺跡 範囲確認調査状況



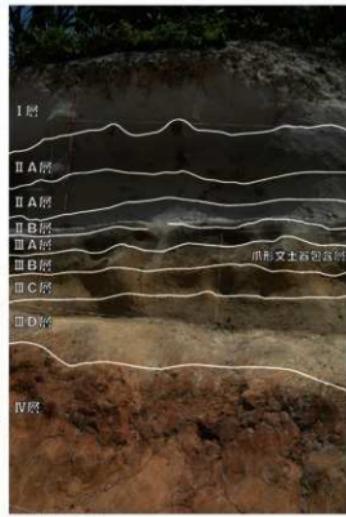
爪形文土器包含層



爪形文土器包含状況



遺物包含層露頭状況



II 地点層序

I 層：現砂丘層、II 層：旧地表・砂丘層、III 層：  
黄褐色～浅黄色シルト砂層、IV 層：浅黄色  
シルト砂層、V 層：明赤褐色砂層、VI 層：  
灰白色砂岩



II 地点西側 爪形文土器出土状況



ビーチロック露頭

調査区

# 戦争遺跡詳細確認調査

事業名：沖縄県戦争遺跡詳細確認調査

調査地：沖縄本島及びその周辺離島、北大東島

時代：近代

調査期間：2012（平成24）年5月1日～2013（平成25）年3月8日の間隨時

調査内容：近代、主に沖縄戦において残された戦争遺跡について、文化財指定などの保存を検討するために測量等の記録調査を行っています。平成24年度は、これまでの調査で重要性が指摘された沖縄本島・座間味村・南大東村の戦争遺跡について実施しました。ここでは、そのいくつかを紹介します。

## 那覇市留魂塙

首里における師範隊の根拠地で、首里城内の物見台である東のアザナの真下に師範学校生によって造られた塙です。証言によると、1945（昭和20）年3月23日から師範学校職員・生徒の生活の場として5月下旬の撤退まで居住し、塙の一部を沖縄新聞社が借り受け使用していたようです。

今回、当センターが実施する首里城跡発掘調査において、この留魂塙付近の調査を行っており、塙口を1ヶ所確認しました。東西40m、南北20mの範囲に全長100mの規模を測り、その平面形はコ字状とした人工塙で、坑木や工具痕などが見られます。なお、この塙はウシジヌガマと言われる自然洞穴を挟み込むような形で造られています。

## 座間味村の忠魂碑

座間味小学校裏手に位置し、保存状態のよい忠魂碑で知られています。今回、土台の裏を観察すると、「昭和十六年七月 土木建築請負業合資会社宮本 那覇市西本町五丁目一番」と刻名された石版を確認しました。建造業者が分かる碑文をもった貴重な資料です。



那覇市留魂塙 塙口



座間味村忠魂碑



忠魂碑（土台裏刻銘）

那覇市西本町	昭和一六年七月
建築請負業合資会社	宮本
五丁目一番	

## 南大東村海軍監視所

南大東島の南端部に位置し、高さ2m、1辺2.3mの六角形を呈し、岩盤の上にコンクリートで造られた構築物です。監視窓のある部屋には階段がありその入口の壁に、1945(昭和20)年5月1日に建立したことと、築造に関わった兵士の名前が記されています。その階級名より海軍兵と思われ、この地に配備された海軍沖縄根拠地大東島派遣隊によるものと考えられます。また、天井外面には「コノモノトルナ」という文字も見られ、このような刻銘はあまり例を見ないようです。

「コノモノトルナ」(天井部刻銘)



南大東村海軍監視所（遠景）



海軍監視所（屋根部分）



海軍監視所（監視部屋壁面刻銘）

## 南城市前川・八重瀬町山川の壕群

南城市玉城前川及び八重瀬町の雄樋川上流域の両岸斜面に多くの壕が掘られ、前川では60基、山川では20基の壕口を確認できます。証言等では、1944(昭和19)年10月の十・十空襲後に2、3世帯共同で作った防空壕で、12月頃には完成したようです。1945(昭和20)年6月初旬に米軍の進撃を受け、前川区民は日本軍や避難民の南部撤退と共に壕を出て共に行動した人が多く、集団自決をした世帯もあります。

前川の壕群は、現在墓として利用されているものが多いです。各壕は、2、3程度の壕口を持ち、平面「コ」字形のものが基本となっており、小部屋や灯り取りなどが設けられるものもあり、天井の高さは1.2～1.5mのものが大半です。ただ、天井が1.7～1.8mと高く、複数以上の部屋を持ち、坑木を持っているものも少数ではありますかが見られます。

後原の壕群は、天井の高さが1.0～1.3mのものが多く、前川の壕群よりやや低い印象を受けます。

このように、民間の防空壕が数多く集中して作られた地域は知られておらず、川沿いにあったため飲料水に困らなかったことが第一の理由として考えられますが、その他にも前川集落及びその周辺は軍隊の駐屯地であったことなど様々な要因が考えられます。



南城市玉城前川の壕群



八重瀬町山川の壕群

## うるま市平敷屋砲台跡

うるま市勝連平敷屋の丘陵に位置し、4基の砲台跡と関連すると思われる格納庫や壕、石杭などが見られます。この平敷屋には、1941（昭和16）年7月に発令された中城湾臨時要塞部隊が同年10月にその第三中隊が配備されました。しかし、同部隊は1942（昭和17）年に改廃され重砲兵第七連隊などに移行し、1945（昭和20）年1月には独立歩兵第十二大隊第五中隊井上分隊が、敵部隊の警戒を任務とする平敷屋分遣隊として派遣されました。

砲台跡は4基見られ、胸壁径が6m前後で、砲座径が1.5～1.7m、その周囲に径約3.7mの範囲にコンクリートを貼り、放射状に5本の溝を有すること、外周をめぐる周溝があることは共通しています。砲台2の周溝に貼られたコンクリートには、「十六年霜月」と刻まれており、先述した要塞部隊が築造したと証明できる重要な資料と思われます。

これらの砲台は2基ずつセットのように通路で繋がれており、その間にはコンクリートの門柱を持った格納庫と考えられる穴が見られます。また、1面に「陸」、その裏面に「防二〇」と刻まれた石杭が丘陵の西端に建っています。これは、長崎県対馬要塞、東京湾要塞などの各地の要塞跡でも確認されています。その用途については、明確な資料は見つかっていませんが、要塞用地の境界を示すものか、測量の基準杭などと考えられます。その他、コンクリートが床面に貼られたものや、半円形の石積遺構など、様々な遺構が見られます。

遺構や資料から考えると、本砲台跡は中城湾臨時要塞部隊によって築造されたものと考えられます。また、砲台にはその規模や、5本の溝を脚台が置かれるスペースだと考えると、八八式七種 野戦高射砲（対航空機用）が置かれていた可能性が高いものと思われます。



うるま市平敷屋砲台跡（砲台2）



霜  
十  
六  
月  
年



陸

石杭表面



防  
二  
〇

石杭裏面

# みやぐに もと じまじょうほう こ ぼ ぐんはくつちょう さ 宮国元島上方古墓群発掘調査

事業名：宮国元島上方古墓群発掘調査

調査地：宮古島市上野字宮国アナガア 812-13、812-89

時代：近世～現代

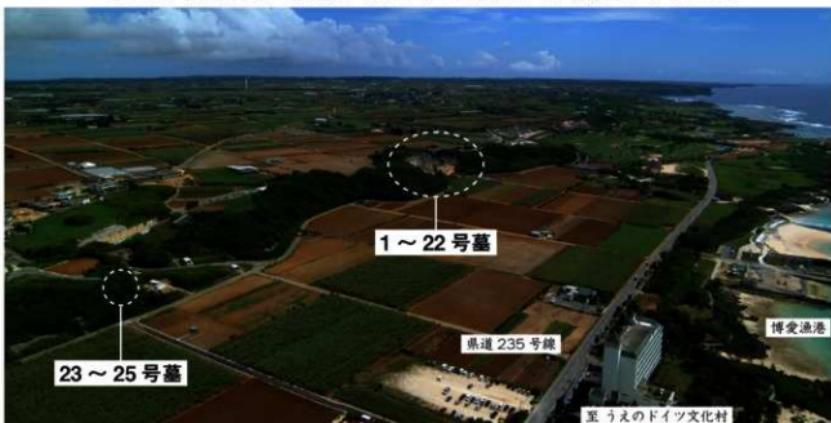
調査期間：2012（平成24）年5月29日～2012年7月27日

調査内容： 平成19年度から始まった本調査ですが、平成24年度に調査したのは岩陰墓2基（24号墓、25号墓）です。

24号墓は、縦穴に近い岩陰を墓室としていて、墓庭には大量の土砂や石が堆積していました。また墓口上部にはモルタルが残っていました。本来は庇のよう<sup>ひさし</sup>に墓口上部を覆っていた可能性があります。墓室からは近現代の陶磁器、ゴム紐、釘、人骨などが出土しました。人骨は改葬、集骨された状態で少量出土しました。人骨から見た最小被葬者数は成人男性2名、成人女性1名、未成人3名でした。

25号墓は岩陰を利用しつつ、周囲の岩を削って横穴を造り、墓室としています。墓口は石積みで閉じられていました。墓室は大人1人がしゃがんで入れる程度の広さです。墓室内からは人骨、近現代の陶磁器、金属製の急須、鏡、ゴム紐、釘、プラスチック製のボタン、櫛などが出土しました。人骨は墓室全体に散乱している状態でした。人骨から見た最小被葬者数は成人女性1名でした。

宮国元島上方古墓群は近世～現代に営まれた墓地ですが、24・25号墓はその中でも新しい時期の墓といえます。また隣接する23号墓からは現在の宮国集落の住所が記載された免許証が出土していることから、24・25号墓に納められた人たちも宮国集落にゆかりのある人だった可能性があります。





24·25号墓 完掘状况



25号墓 墓室内 遗物検出状況

しらほさおねたばるどうけついせき  
**白保竿根田原洞穴遺跡**

事業名：白保竿根田原洞穴遺跡確認調査

所在地：石垣市盛山～白保

時代：後期更新世～グスク時代

調査期間：2013（平成25）年1月7日～3月6日

調査内容：白保竿根田原洞穴遺跡は、今年の3月7日に開港した新石垣空港内に位置する遺跡です。2010（平成22）年度に空港建設に伴う調査を実施した結果、化石ホールから採取した人骨3点については、放射性炭素年代測定（AMS法）により、約2万年前の後期更新世（旧石器時代）まで遡る年代値が得られています。この年代は、骨から直接引き出したものとしては日本最古であるとともに、その当時の石垣島に人類が到達していたことを示す、極めて重要な科学的証拠として、マスコミでも大きく取上げられました。

遺跡からは、この後期更新世（約24,000～12,000年前）のほか、完新世初頭（約9,500年前）、下田原期～無土器期（約4,000～2,000年前）、グスク時代（約600年前）にわたり断続的に各時期の遺物が確認された、国内でも数少ない複合遺跡であることがわかっています。その後、遺跡はその重要性から今後の措置について関係機関により協議が行われ、工事の計画を一部変更し、現状保存することになりました。

それから2年後、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、文化庁の補助を受けて3ヶ年計画で重要遺跡確認調査を行うこととし、昨年度は2013（平成25）年1月～3月にかけて発掘調査を実施しました。調査にあたっては、形質人類学、DNA分析、年代測定の関連分野の先生方に分析を依頼しつつ、より正確な分析結果が得られるよう、遺物の検出や記録、取上げ、運搬、サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めました。現在、出土遺物は分析中ですが、その中で注目される事項を次に挙げてみたいと思います。

- ① 前回の調査で、16,000年～18,000年前（BP）<sup>†</sup>のヒトの頭骨や顔面の一部が出土していたグリッドをさらに掘り下げたところ、下頸骨や顔面の一部が良好な状態で出土しています。
- ② 調査区の南端（南壁）において、地表面に人骨の一部が露出していたことから、詳細な遺跡の範囲を確認するため、周辺の掘り下げを行いました。その結果、人骨に下田原式土器や石器を伴う上層と、人骨のみが出土する下層が確認されています。

これらの遺物は現在分析中ですが、今後新たな年代やDNAが出る可能性と、頭蓋骨片がまとまって得られていることから、頭の形や顔の復元につながる可能性を有しており、今後の研究結果が期待されます。

※ BP 年代測定で年代を表す指標。1950年を基点とし、どれくらい年代がさかのぼるかを示す。



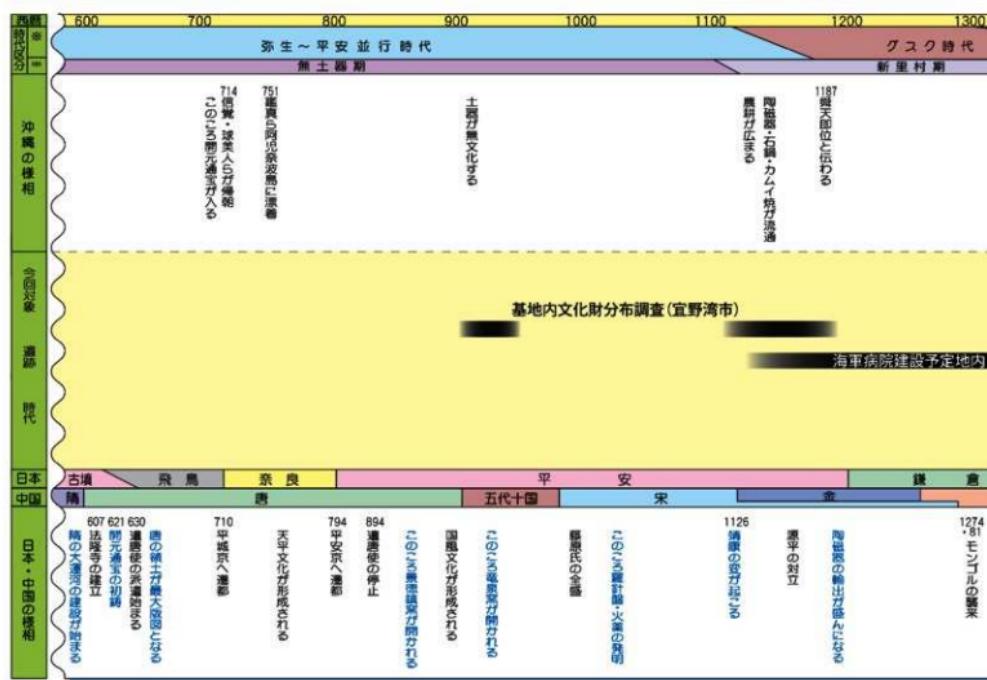
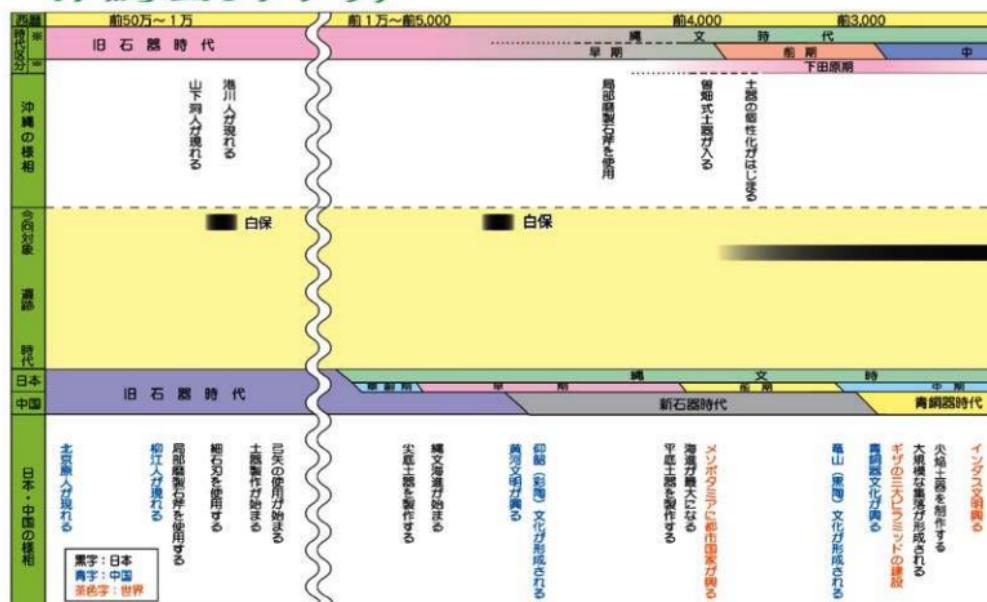
白保竿根田原洞穴遺跡近景（画像上部に見えるのは滑走路とターミナル）



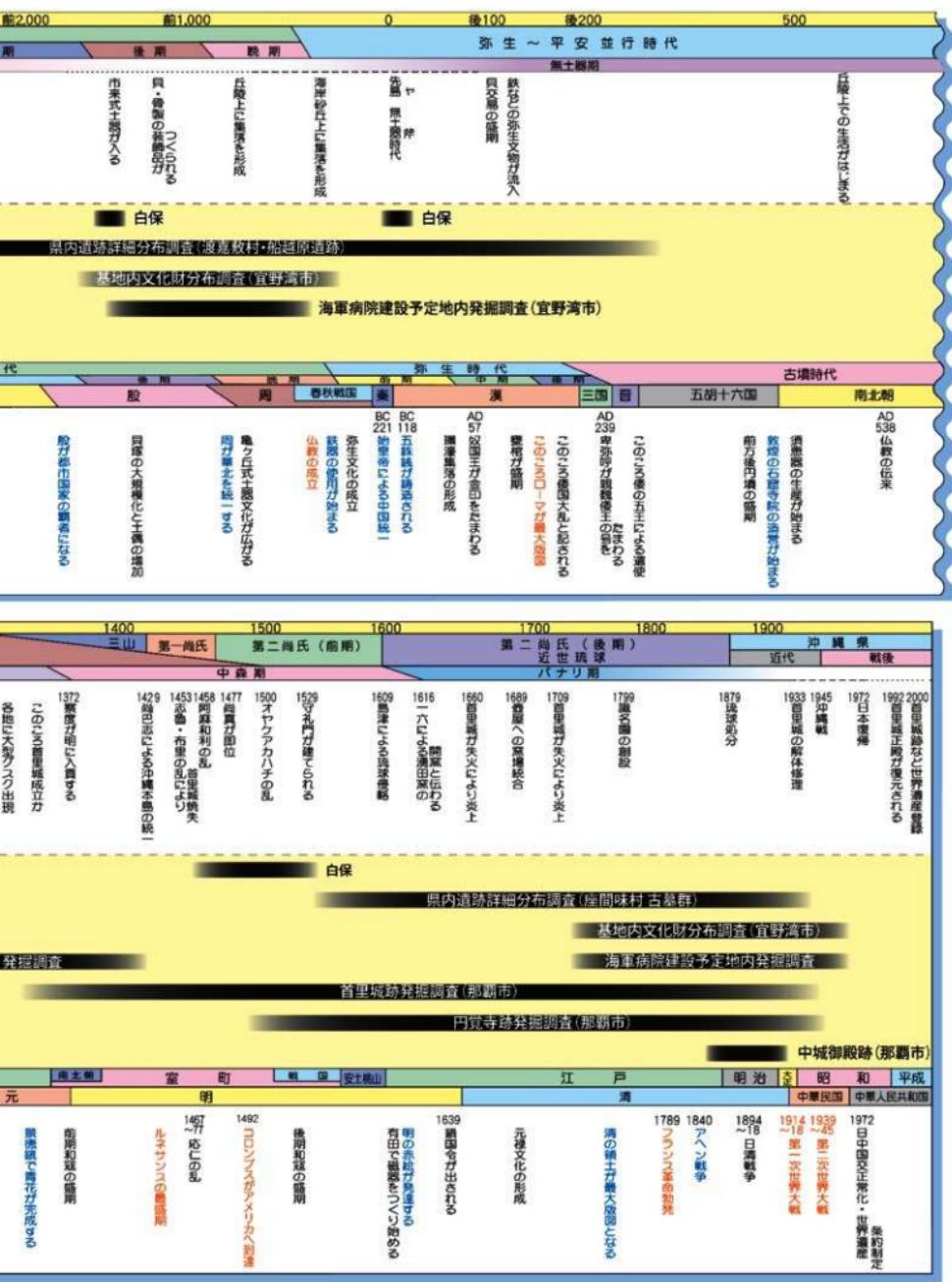
人骨検出作業状況

# 沖縄歴史年表

\*1……沖縄本島時代区分 \*2……八重山諸島時代区分



自保…自保竿根田原洞穴遺跡(石垣市)



## 発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。

「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく3つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなった遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、若しくは以下にお問い合わせください

○沖縄県教育庁文化財課 記念物班 埋蔵文化財担当 TEL 098-866-2731

○沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 TEL 098-835-8752

---

---

平成 25 年度企画展  
「発掘調査速報展 2013」  
2013（平成 25）年 8 月 20 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7  
電話 098-835-8752  
FAX 098-835-8754

---

---

# 行事予定のご案内

## 関連文化講座

会場：当センター研修室 13:00 開場 13:30 開講 先着140名・予約不要・参加無料

### 8月31日（土）

#### 第55回文化講座 **発掘調査速報 その1**

- ① 円覚寺跡発掘調査（那覇市）
- ② 首里城跡発掘調査（那覇市）
- ③ 中城御殿跡発掘調査（那覇市）
- ④ 基地内文化財分布調査（宜野湾市）

### 9月21日（土）

#### 第56回文化講座 **発掘調査速報 その2**

- ① 海軍病院建設予定地内発掘調査（宜野湾市）
- ② 県内遺跡詳細分布調査（座間味村・渡嘉敷村）
- ③ 戦争遺跡詳細確認調査（県内各地）
- ④ 白保竿根田原洞穴発掘調査（石垣市）

## 企画展

11月1日（金）～2014年3月23日（日）

### 重要文化財公開 **首里城京の内跡出土品展**

#### 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 (琉球大学附属病院横)

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

<http://www.pref.okinawa.jp/edu/>

- 開所時間 午前9時～午後5時まで（入所は午後4時30分まで）
- 休 所 日 毎週月曜日、国民の休日（子どもの日、文化の日を除く）  
年末年始（12月28日～1月4日）、慰靈の日（6月23日）  
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所